



NPO☆Kyoken通信

特定非営利活動法人教育研究所発行113号 平成25年12月25日発行

本部 〒233-0013 横浜市港南区丸山台2-26-20 宇奈月自立塾 〒938-0282 富山県黒部市宇奈月温泉5509-16

TEL:045-848-3761/FAX:045-848-3742
URL:<http://kyoken.org/>

TEL:0765-62-9681/FAX:0765-62-1120
E-mail:contact@kyoken.org

にいかわサポートステーション 〒938-0037 富山県黒部市新牧野103 ファースビル3F

TEL:0765-57-2446/FAX:0765-57-2447

mail:info@niikawasaposute.org

今年も残すところ、あと1週間になりました。会員の皆さまはどのようにお過ごしでしょうか？
宇奈月で自立塾を始めてから、早くも9年目が終わろうとしています。この9年間は当NPO法人にとって、最も苦しい時期でした。

民主党政権による若者自立塾の事業仕分け、求職者支援制度を使った合宿型による自立支援事業で、再び事業仕分けに合い、廃業状態にまで追い込まれました。しかし、その事業を利用し、約7割以上のひきこもり・ニートの若者が経済的自立を果たし、大きな成果が出たのにもかかわらず廃止になったのは、今でも悔しく思います。その後、自公民政権になって、今年の7月から、サポートステーションの事業の一つとして、合宿型の集中訓練が復活しました。

学歴はあるが、コミュニケーション力の欠如・廻りの人の気持ちが読めない・しつけが十分に出来ていないことから来る生活を続けていくために必要な自分自身のことが出来ない若者達のために、1週間から3カ月程度の短期集中訓練では十分な成果をあげられない、中途半端な仕組みのように思えます。

さらに、発達障害や他の精神疾患を持ちながら、十分な医療ケアや対応がなされないひきこもりやニートの若者が多くいます。また、これらの事業に参加したくても、寮での生活費が経済的に苦しく参加できない若者も多くいます。生活保護者や生活困窮者だけでなく、格差社会の進行により、貧困層の連鎖は確実に始まっています。

しかし、私達現場の人間は不十分な仕組みの中でも、最大限の成果をあげるべく努力をしなければなりません。それは、未来を担う若者達のためです。先立つものが不足する中、何とか借金を返済しながら、来年も若者達に希望の未来を拓くために、NPO法人教育研究所の職員、宇奈月若者自立塾のスタッフ、にいかわ地域若者サポートステーションのスタッフは力を合わせ頑張っていく所存です。どうぞご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。末筆になりましたが、みなさん、どうぞ、よいお年をお迎えください。

サポステと今年的一年

にいかわ若者サポートステーション 統括コーディネータ
牟田 光生

今年を振り返ると、富山県宇奈月(黒部)の現場では様々な事が転換した一年だったと思う。
あっという間に時が経った感じだ。

雪の深い中、魚津・黒部・入善・朝日を回り、サポステの設置を快諾・許可していただいた。富山県には申請がギリギリになり非常に迷惑をかけたが、なんとかやりたい気持ちがあった意義は大きい。
合宿型の自立塾と、サポステのメリット・デメリットは勿論それぞれある。宇奈月温泉は北アルプスに抱かれた観光地だ。我々県外人からすると富山市も宇奈月温泉も変わらない気がするが、もう9年も住んでいる私(寮長)が序々と感じていたのは、県内の各地から宇奈月に来る(地元民は「登る」「上がる」と言葉では使う)のは非常に遠いと言う事だ。横浜の感覚で言うと、箱根に自立塾があるような感じだ。富山からみたら横浜も箱根もそう距離は変わらない。

まして、合宿施設に気軽に相談…本人達からすればいきなり強制で塾に入れられるのではないかと疑問も付く。(そんな事は一切ありませんが…)

そんな状況下、黒部市で気軽に無料で相談や社会参加へのプログラムが受けられる「にいかわ若者サポートステーション」が4月から我々の手でオープン出来た。場所も北日本タスクの安藤社長のツテで非常に安く、初期投資がほとんどないような状況で借りる事が出来、新規のスタッフも雇う事が出来、事業拡大も少しずつ図れた。サポステ事業としては月間利用者数が大体述べて200~300人位が利用し、プログラムも1回平均で5~15人規模で運営している。

来年に向けての課題は山積しているが、昨年の非常にあまりにも苦しく厳しくギブアップ寸前の状況からは少し一息つけたかな、とは思う。

我々教育研究所が持っているスキル・技術にプラスした、富山で得た関連機関との関係や人脈等のステータスを大きく広く気軽に、利用者に還元出来る事がサポステの利点ではないかと考えている。

もちろん、今後の課題・スキルアップ等・経営面等問題は山積しており、サポステ事業自体も楽観視出来る状況には無い。

が、ほんの少し希望の見えた一年でもあった。

サポステと合宿型

全国的に「合宿を行う」と言う事が毛嫌いされつつある。

「個人の時間・個人の居場所」と言われ、合宿・共同生活が敬遠されがちな現代社会だ。

個人的な事になるが、私の母校は全寮制の高校だったが、15年ほど前から通学生も受け入れており、良き風紀が薄れてしまった。今の日本の流れだ…

私は30代半ばだが、合宿生活で人生の半分を生きてきた。

ニート・不登校含めた今の若者の大きな課題の一つは人間関係全般の能力とタフさだ。

人間関係に問題や支障・過剰適応等の状態が無ければ躓きにくくなるし、それらを含め、なにがあっても折れない精神的なタフさがあれば、ニート・不登校にはなり難い。

コミュニケーションの仕方一つ取っても昔に比べ携帯だのパソコンだのがあり、画面を通じたコミュニケーションを取る事ができ非常に便利になった反面、リアルな関係を構築していく機会には恵まれていない。

ガツンと昭和的な親が言って、根性一つだ！と説いても、学校含め周りの環境がそうでない、今の世の中でそれらを言っても時代錯誤で打っても鐘は響かない。

寮・合宿の最大の利点は **環境を変える** 事が出来るということ。

その上で人間関係力の構築と一人暮らしの疑似体験が出来る。

一見一人暮らしの方が、自由で楽そうに見える…しかし、一人暮らしは全て（料理・洗濯・掃除）を一人で行わなければならないが、寮は当番制である（自分の洗濯物だけは自分でやらなければならない）。それらが、最初はひと作業だが、次第に日常になり当たり前になる。生活リズムも身に付く。全国様々なサポステで調理実習は皆で楽しく出来る（計画・協力作業・結果が重なっておりわかりやすい）と割と好評ではあるが、塾では当たりの日常だ。一つひとつ作業だと思っていたことが当たり前になり、苦にならない。それが自立への一歩だ。

合宿支援施設とサポステ

	合宿支援施設（宇奈月自立塾）	サポステ
相談までの気軽さ	イメージ的に軽くない	気軽に無料で出来る
費用	生活費+訓練費がかかる	基本的には無料（有料もある）
社会復帰まで	早い 6カ月程度（個人差あり）	他サポステでは長引く傾向有り
形態	合宿生活を中心とした日常	通い フリースペース的
支援密度	24時間なので濃い	通っている間だけなので薄い
どんな人に効果的か？	合宿生活をおくれる状態の人 （自傷他害が無い方）（状態によっては他機関ヘリファアー）	全て対象（状態によっては他機関ヘリファアー）

30年前の教育研究所 (1980年代からの不登校と関わって その2)

～昭和型不登校から平成型不登校～

久玉 和昭

昭和の時代が終わりを告げた。1989年1月に元号が平成となり、新しい時代の幕開けとなった。しかし1990年代に入ると、日本はバブル経済の終焉を迎え、「失われた10年」「失われた20年」と後に言われる閉塞の時代に突入していく。

学校を取り巻く環境も、時代に応じて激変して行く。不登校の数も1990年(平成2年)までには小学校中学校合わせて6万人前後の数字だったが、1995年(平成7年)には10万人を突破し、1997年(平成9年)には、2倍の13万人に達した。それ以来10万人前後の数字が続いて行く。

教育研究所に通ってくる不登校の子どもたちも少しずつ変化していく。教育研究所での不登校受け入れは、基本的には、小中学校の義務教育課程の子どもたちが中心であった。高校年齢の子どもたちも受け入れてきたが、当時の教育研究所に通ってくる不登校の子どもたちへの指導は、基本的には「学校復帰」「高校進学」「高校卒業」であり、学校社会で傷つき、疲弊してきた子どもたちを「精神的に休ませ」「勉強を見て」「学校社会に適応」していくことを目標にしていた。

その後は本人の努力であり、人生であり、教育研究所は困ったときや疲れた時に気軽に休める、港のような存在であればよかったような気がする。実際、高校に進学して行った子どもたちも、何かあれば教研に顔をだすことが多かったが、それなりに高校を卒業して、次のステージに進んでいく子どもたちも大勢いた。当時のスタッフの意識は、高校は自分の意識で行くところであり、中学校などと違い、高校で不登校になることはないだろうという気持ちが強かった。したがって教研で不登校の高校部を設けるということになった時に、誰も「ウーン、高校生でも不登校になるのか」という感情を持たざるを得なかった。文部科学省が高校の不登校調査を開始するのは、2004年からであり、まだ10年以上も先の話である。まして大学で不登校状態になる子どもが出てくるなんて夢にも思わなかった。

その時代から、子どもを取り巻く教育環境も変化していった。従来、現役高校生は、塾には行かないで、自分で勉強をし、どうしても外部の教育機関を利用したいときは、予備校の夏期講習や冬季講習を利用せざるを得なかった。予備校に行くのは浪人生であった。しかし、塾、予備校が現役高校生の教室の事業展開を開始し、高校生も塾に通うのがあたり前になり、高校生の思考の一元化が起り始めた。また教育の個別化もはじまり、個別指導形態をとる塾が主流になり始めたのもこの時代である。世の中が「全体対応」より「個人対応」を望むようになってきた。一方子どもたちにとって「しなくてははいけない」という義務意識から「しなくてもよい」という権利意識への転換が起きたのもこの時代ではないだろうか。

朝、教育研究所に通ってくる不登校の子どもたちの大半は、全世界の不幸を肩に背負ったようにして、うつむきながら歩いて来ていた。しかし、時代はいつのまにか何の不安もなさそうに、楽しそうに通ってくる子どもた

ちへと変化した。ほとんど会話をしないで黙って座っていた子どもたちの集団がいつの間にか、抵抗なくおしゃべりをする集団に変わっていった。スタッフのスタンスも、「指導者」というより「友達」という感覚に変化していった。また不登校をとりまく環境も中学校卒業、高校入学、などのハードルが改善され、不登校児童・生徒にとって進級・進学が容易になってきたが、それに伴い失うものもあったのかもしれない。

不登校児童生徒のみならず「全体授業より個別授業」「合宿より通所」「全体行動より個人行動」、子どもたちの意識構造が「公的な意識」から「私的な意識」へ変容していった。

いま手元に、教育研究所が2002年に文部科学省委託事業で調査研究した「SSP」(スクール・サポート・プログラム)の調査結果がある。それによると、1980年代～1990年代の不登校の子どもたちの心理意識が、心因性の不登校から無気力型の不登校へ少しずつではあるが、重心が移動していったと分析してある。また自己葛藤からおこる「自罰傾向」が減少し「他罰傾向」の増加へと変化していったとも記されている。

激変する社会のなかで不登校の子どもたちとどのように対応していったのか、今回は2000年以降の子どもたちの様子を当時のスタッフの話も交えて記載します。 【続く】

生活保護者の居場所作り事業を通して

生活保護者の居場所づくり事業として、宇奈月自立塾にて共同生活をしている方々があります。当然、生活保護を受給するに至った状況は一人ひとり異なりますが、なかには、幼い頃から生活保護世帯で育ってきた方もいます。

全国に生活保護受給者は215万人以上。そのうち未成年者は30万人弱います。被保護世帯の子どもたちは「進学資金に乏しい」「親の労働している姿を見られない」などの状況が考慮され、ある種のハンディを背負って生きていると考えられます。生活保護家庭で育った子が不登校になる割合は、生活が安定した家庭の子と比べ4～5倍になるという調査結果もあります。

生活保護ではないが就学援助が必要な小学生・中学生(＝準要保護者)は全国に約135万人いるとされ、子どもの7人に1人が貧困状況にあると推定されています。

今年(2013年)、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立し、子どもの貧困は深刻な課題となっています。貧困の連鎖が続いていかぬよう、より幅広い支援を考えていきたいと思えます。

1月～3月までスケジュール

	宇奈月	にいかわサポステ	横浜
1月7日(火)		集中訓練プログラム開始予定 (3カ月)	
1月18日(土)		コラージュ・保護者勉強会	
1月21日(火)		地域連携会議	
2月23日(日)		コラージュ・保護者勉強会	
3月3日(月)		集中訓練プログラム予定(1か月)	
3月22日(土)		コラージュ・保護者勉強会	

※ にいかわサポステの詳細スケジュールはサポステ通信をご欄下さい



コシヒカリ 100%の黒部米、新米を発売開始しました。

黒部市でとれる「黒部米」コシヒカリは特許庁の「地域団体商標」いわゆる地域ブランドに「米」として全国ではじめて認定されたお米です。

黒部川の豊富な水量のおかげでこの地域は湧き水が多く、黒部川湧水群として名水百選の一つにも選ばれている、この美味しい水によって作られるお米は「コシヒカリ」で、日本のお米を代表する銘柄です。

北アルプスの雪解けで水量豊富できれいな黒部川の水を使って育つ「コシヒカリ」は、冷めても甘味があって、食通の間

でも評価の高い「米」なんです！ そんな美味しいお米ですが…

流通経路は8割がた東海地区(主に愛知県)でした、これを全国に食べてもらいたい！！

そして…働きたいけど悩める若者達が居る…そんな若者が元氣良く働ける社会を作る為にも！

とつても！とつても！！美味しいお米！みなさんもぜひ食べられ～！



塾でも新米を美味しく食べています！

注文票

5^{kg} 2500円 ×

ご自宅までの送料…(全国一律) 1000円 (30^{kg}までこの代金です)
お歳暮、お中元、贈り物にも最適です。

こちらをご記入下さい(必須)

〒

送付先住所

電話番号

氏名

メールアドレス

こちらを 0765-62-1120 までFAXをお願い致します。

なお TEL 番は 0765-62-9681 です。メールでのご注文は m_muta@kyoken.org です

FAX 送信後ご入金を

北陸銀行 宇奈月支店 普通 口座番号 5014010 特定非営利活動法人教育研究所
迄お願いいたします。入金確認後3~4日で届けさせていただきます。

編集後記

・この秋、内閣のアウトリーチ研修を2週間、その後、厚生労働省社会福祉推進事業をKHJ全国ひきこもり親の会主催のピアサポート研修を2泊3日で宇奈月自立塾にて行った。宿泊施設を自前で持つ団体も少数あるが、50人以上が泊れる研修施設はどこにもない。もちろん、民間の有料施設、代々木のオリンピック記念センター等、公共の施設はあるが、私達の施設の特徴はスタッフと塾生が一緒になって参加者の食事、部屋の片づけ等行うことである。参加者から「あの若者や中年の方は、スタッフですか、あるいはボランティアですか」と聞かれる、塾生です。そう貴方のお子さんと同じく、数カ月前はひきこもりやニートでしたと答えると、皆、一様に驚いていた。参加者が研修と合宿型施設の視察を同時に行える良さは他にはないだろう。

・12月10日に文部科学省は平成24年度「児童生徒の問題行動等生活指導上の諸問題に関する調査」結果を発表した。大津のいじめ自殺発覚から全ての地域の学校とは言わないが、学校現場ではいじめの発見に心血が注がれている。そのため、認知率が向上した。それを一部の報道機関ではいじめが増えたという記事にしている。とんでもない認識の誤りである。いじめはいつでもどこでも起こりえるという前提条件に立ち、いじめをなくすためには、まず、教師や大人が見えない不可視空間で行われるから、初期の段階で、まず、発見することがベストである。しかし、回の調査は教師の発見数である。今、当研究所では文部科学省の予算でいじめ予防の標準化を目指し、調査研究を行なっているが、児童生徒の申告では、教師発見の約10倍の数値である。いじめは不登校・ひきこもりへと繋がることが多い。そのためにも、まずは、いじめの認知（発生）に気がつかなければならないと思う。

この調査結果の解説を当研究所の所長がNHKラジオ「NHKジャーナル」で行っている。

<http://kyoken.org/communicate/media/index.htm>

・1月から厚生労働省の委託事業の集中訓練が始まる予定です。訓練費は国負担です。参加についての問い合わせは、にいかわサポステで現在行っています。参加希望の方はご連絡ください。

・参加者が興味を引くような、企画を来春から打ち上げ花火のごとく打ち上げます。どうぞ期待！

・冬の宇奈月良いですよ！会員なら非常に安く利用できます。

寄付の募集です

4月から厚生労働省の委託事業である「若者サポートステーション」事業を黒部市新川地区で「にいかわサポステ」として開所、運営しています。国からの助成金も今後決済されてきますが、NPO法人教育研究所全体としては、まだまだ安定した経営状況だとは言えません。研究投資、人材投資等にも相当の予算が必要になってきます。NPOの会員の皆様の温かい寄付をお願いします。認定NPOになるためにも、まだ、まだ、足りません！

寄付は次の銀行、郵便局からお願いします。

横浜銀行 上永谷支店 (323) 普通 1442822 名義 特定非営利活動法人教育研究所 理事長 牟田武生
郵便振替 00230-9-112182 特定非営利活動法人 教育研究所